

✧ 研究会報告 ✧

租界・居留地班 第 85 回研究会

近代日本美術における「中国趣味」の 図像学的検証 —女性像の実態と変遷—

日時：2023 年 7 月 21 日（金）15:00～17:00

場所：対面＋Zoom のハイフレックス開催

対面会場：みなとみらいキャンパス・20032 室

彭 国躍（非文字資料研究センター 研究員）

1. 問題提起

20 世紀前半期（明治・大正・戦前昭和期）の近代日本美術において、「中国趣味」と言われるようなブーム現象があったことが時々美術史関連の文献で言及される。その作品例として西洋画家の藤島武二の「匂い」（1915）、小林万吾の「花魁」（1927）、安井曾太郎の「金蓉」（1934）や岡田三郎助の「婦人半身像」（1936）などがよく取りあげられる。ブリヂストン美術館では 2014 年（4 月 26 日～7 月 21 日）に「描かれたチャイナドレス—藤島武二から梅原龍三郎まで」を主題とする美術展覧会が開かれ、その展示作品リスト（17 名の画家の 29 点の作品）からも当時のブーム現象の一端がうかがえる。近代日本美術における中国趣味の問題をさらに追究しようとする、次のような疑問が浮上してくる。

- (1) 全体としてどのぐらいの画家たちがかわっていたのか。
- (2) どの期間に現れ、その間絵画の表現内容と手法に変化はなかったのか。
- (3) それらの作品にはどのような図像学的特徴が見られるのか。

2. 本研究・調査の方法

筆者は、上記の問題について、以下の 2 点を中心に図像データを収集し、研究調査を実施した。

- (1) 西洋画と日本画を含む近代日本美術に現れた中国関連の人物、風景などが描かれた作品のカラー図版を官展など各種美術展の出品作を中心に網羅的に収集する。
 - (2) 収集されたカラーの作品図版を時代、画種、内容別に分類し、それぞれの作品に現れた図像学的特徴、時代変化などについて分析と考察を行う。
- 今回は、上記の方法で収集されたカラーの図像データ

に基づき、「中国趣味における女性像」の実態と変遷にフォーカスをしぼって調査報告を行った。

3. 調査結果の報告

研究会では、発見、収集された作品のカラー図版をスライドで見せながら、その画種の分布、発生時期、図像学的特徴や時代的变化などについて解説を行ったが、発表内容の概略を以下のようにまとめる。

3.1 作品の規模と画種分布

今回の調査の結果、（中国人または中国服を着た）女性が描かれたカラーの作品図版として、60 名の画家による 94 点の作品が収集された。そのうち、西洋画では 39 名（65%）の画家による 63 点（67%）の作品、日本画では 21 名（35%）の画家による 31 点（33%）の作品図版が発見された。この調査で「中国趣味における女性像」に関連する 94 点の作品の中で、6 割以上の西洋画と 3 割以上の日本画の割合で分布していることが観察され、作品の量的差はあるものの、両画種のいずれにもブーム現象があったと認められる。

3.2 作品の出現期間とブームの流れ

「中国趣味における女性像」の出現期間について、全体として 94 点の作品は 1900 年代初頭頃から 1940 年代前半頃までの約 40 年の間に分布し、そのうち、西洋画における女性像の作品は 1915（大正 4）年の藤島武二の「匂い」から 1943（昭和 18）年の島村三七雄の「村婢」との間に、日本画における女性像の作品は 1901（明治 34）年の山村耕花の「重陽」と 1941（昭和 16）年の三宅鳳白の「暮笛」との間にそれぞれ分布し、中国服の女性像がモチーフとなる作品の始まりは日本画の方が西洋画より 10 年ほど早かったこと、そして、ブームの終わりは西洋画と日本画のいずれも



1940年代の前期頃、つまり日中戦争の最中であったことが観察される。

ブームの流れについて、西洋画においては1927（昭和2）年を頂点とするブームのピーク期（1925～28年）が観察されるが、一方、日本画においては全体として1920年代に作品が多く現れるが、急激な変化は見られず、ブームは1901～41年の間に緩やかに変化しながら続いていた一面が観察される。

3.3 作品の画像学的特徴

（1）服装について、清代のチャイナドレス（旗袍）がもっとも多く描かれ、94点作品中73点（77.7%）となるが、それ以外に明代や唐代以前の古代服の女性も描かれている。唐代以前の服装は多く日本画に分布し、主に「楊貴妃、花木蘭」など特定時代の人物が描かれる場合に現れる。

（2）人物像について、西洋画では全身像と半身像の両方が描かれるが、日本画では（立像と坐像にかかわらず）ほぼすべてが全身像として描かれている（図1～4参照）。

（3）背景と小道具について、画面には人物以外の要素として、中国庭園、太湖石、中国様式の家具（ベッド、テーブル、椅子、茶卓、絨毯）、小道具（傘、扇子、団扇、キセル、髪飾り）、楽器（胡弓、琵琶、琴、竹笛）、調度品（唐三彩、陶磁器、花瓶、茶壺、酒壺、鳥籠、書

画、刺繍）、動物（馬、驢馬、黄牛、家鴨、鵪、金魚）、植物（牡丹、菊、蓮、白木蓮、花菖蒲、石榴）などが描かれている。

4. まとめ

今回の調査で観察されたもっとも顕著な特徴は次の3点にまとめられる。

（1）西洋画では、1920年代まではアトリエの中で中国服を着せたモデル、家族や自画像を描いたものが多かったが、30年代以後には中国の街角に現れる女性像、中国社会の世相、地域的風土まで描きこまれるような作品が増える傾向が現れた（図1、図2参照）。

（2）西洋画では、時代が下がるにつれ、藤島武二、小林万吾、埴原久和代、正宗得三郎、安井曾太郎、椿貞雄などの作品が示すようにチャイナドレスのデザイン、色彩や紋様などの外面的装飾美の描写に対する関心から、野口弥太郎、田口省吾、広本季与丸、木下孝則、岡田謙三、島村三七雄などの作品が示すように現実の中国人女性の内面的気質の表現に対する関心へと移り変わった一面が観察された（図1、図2参照）。

（3）日本画では、寺崎広業、玉舎春輝、橋本関雪、鴨下晁湖、三宅鳳白などの作品が示すように、一貫して歴史・伝説上の人物、舞台女優、中国楽器奏者などが多く描かれ、西洋画に現れる（1）と（2）のような明確な時代変化は見られなかった（図3、図4参照）。



図1 「支那服着たる婦人像」（西洋画）
椿貞雄 1922 大正11年第1回春陽会展出品
図版出典：郵便はがき 清和堂製版印刷株式会社発行



図2 「母親と姑娘」（西洋画）
広本季与丸 1939 昭和14年第3回新文展出品
図版出典：郵便はがき 芸艸堂・巧芸堂美術工芸会発行



図3 「青衣の女」(日本画)^注
広島晃甫 1919 大正 8 年第 1 回帝展出品
図版出典：郵便はがき UNION POSTALE
UNIVERSELLE



図4 「池畔」(日本画)
榊原縫子 1928 昭和 3 年第 9 回帝展出品
図版出典：郵便はがき 美術工芸会発行

【注】

京都で開かれた第 1 回帝展の展示会場で展示作品への「墨塗り事件」が
起こり、「青衣の女」もその被害作品に含まれていた。その後原作者によ
る描き直しの 2 作目の「青衣の女」が制作された（『日展史 6』財団法人
日展発行 1984 p. 156）。図 3 は筆者によって発見された被害を蒙る前
に印刷された 1 作目のカラー図版である。